

## 家族も、それぞれ個性を持つ

二〇〇〇年七月に、Sさん宅を初回往診した。Sさんは六十四歳の男性で、人当たりのよい紳士という印象であった。一九九九年の三月ごろから、しゃべり方がおかしくなり、だんだん腕の力がなくなり、歩行も不安定で、筋萎縮性側索硬化症(ALS)と診断された。通院困難となってきたので、通院先の病院からわれわれに紹介された。

主介護者は奥様で、娘さんも同居されていた。初診時、特上のおすしが準備されていて、私と看護師はお断りしたが、奥様の強いお誘いで、結局Sさんと一緒においしい昼食をごちそうになった。奥様の目的は、(われわれの接待のほかに)どうもSさんの飲み込みが悪いのを診て欲しかったようで、確かに飲み込みが悪く、誤嚥の危険性が高い状態であった。羸瘦が著しく、栄養状態も悪いので、エンシユアリキッド(流動食)を飲んでもらうようお願いした。

胃瘻やマーゲンチューブの話もしたが、なかなか受け入れてもらえず苦労し

た。両上肢は挙上不能、歩行は必ず介助がいる状態で、訪問看護やホームヘルパーの導入について説明しても、「主人が病気で苦しんでいるのに、介護するのは妻の私の務めです」の一点張りで、われわれの話を聞いていただけない。今どき、立派な奥様だと感心しつつも、燃え尽きなければよいなあと心配しながら三か月が過ぎた。この間の奥様の介護は、本当に頭の下がるような献身ぶりであった。

症状は徐々に進行し、二〇〇〇年十月には胃瘻造設、その後、訪問看護を導入したが、ホームヘルパーは最後まで導入できなかった。ついに、二〇〇一年一月には奥様の介護疲れのため、入院(入院を兼ねたショートステイ)となった。

退院後のフォロー(在宅復帰)の話し合いの場で、同居中の娘さんが、われわれを厳しく批判された。娘さんは、われわれがSさんを無理に在宅に縛り付けたのだと主張される。献身的在宅介護をされた奥様は、「結婚以来、家庭内暴力を受け続けてきた私が、何であの人を介護し

ナカノ在宅医療クリニック

— 中野一司 —



なければならぬのか?」と、おっしゃる。われわれとしては、「あれー?」という感じであった。もし、その場にSさんがいたら、晴天のへきれきであっただろう。

家族との話し合いの末、Sさんは某介護施設に転院となり、三か月後に同施設でお亡くなりになった。

最近、家庭内暴力に悩む別のご家族のターミナルケアについてのご相談に対応した。病気の不安から母親に対し暴力を振るう父親を見て、介護者の方は自分の家族は特別な(悪い)家族だと思いつまっていたようである。

絵に描いたような理想の家族はまれである。家族も、それぞれ個性を持つ。